九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 会沢正志斎における西洋文化受容

韓，淑婷
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

https://doi.org/10.15017/1806665

出版情報：地球社会統合科学研究. 6, pp.17-28, 2017-02-28. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』６号 17～28
*Integrated Sciences for Global Society Studies*
No.６，pp. 17～28

# 会沢正志斎における西洋文化受容

韓（カン）　淑（シュク）　婷（テイ）

## １、はじめに

日本の近代化は、西洋の軍事技術の学習及び合理的自然科学の知的摂取、西洋の社会体制・宗教を含めた西洋文化の全般的受容のプロセスでもあった。西洋文化の吸収過程において、儒学的宇宙観を基盤とした伝統文化との対峙・融合をどのように取り扱うのかをめぐってさまざまな受容のパターンが形成されていった。幕末の西洋文化受容のパターンについての研究は主に佐久間象山や横井小楠に代表される洋学者を対象に進められた。それにより、「東洋道徳、西洋芸術」論のような西洋文化受容のパターンが、伝統儒学に対する再解釈によって西洋の自然科学ないし政治体制を受け入れる根拠を得、後期水戸学的鎖国攘夷論を克服したことにより、西洋文化の総体的な導入を理論的に可能にした転換的な思想として位置づけられている。

一方、西洋文化を原理的に拒絶して攘夷を唱えたいわゆる攘夷論者も、西洋の軍事技術を導入し日本の軍事力を向上させるという国防論を唱えるなど、西洋文化を一概に拒絶していたわけではない。攘夷論者の代表ともいうべき後期水戸学者については、尾藤正英氏らをはじめとする同学の尊王攘夷の理論的根拠、明治天皇制国家のイデオロギーという視点からの検討が数多く存在している[1]が、後期水戸学者の洋学受容・拒否についての研究も看取される。同研究においては、後期水戸学者の「西洋」への関心に着目して検討されており、水戸藩政改革における「西洋」摂取[2]、藩主徳川斉昭をはじめとする水戸藩関係者の西洋情報収集と利用といった藩政史上の具体的分析[3]が存在する一方、同学者が鎖国攘夷論に基づいて洋学受容に警戒的であったとの指摘も存在している。

かかる相異なる指摘は、後期水戸学者（攘夷論者）が西洋受容において二律背反的であったことを示唆しているものと思われるが、これらの研究は、十九世紀前葉・中葉の後期水戸学者のあり方を検討したものであり、維新以後における日本の西洋受容のあり方を展望する視点が弱いことも止むを得ないものと考えられる。

このような点を踏まえ、本稿では後期水戸学の代表的存在ともいうべき会沢正志斎に関して、彼の西洋の自然科学・政治体制・宗教に対する認識や西洋軍事技術導入の主張を検討し、西洋文化受容のパターンを抽出することとしたい。そして、それが維新変革後、日本の近代化（文明開化）を通していかなる場面で有効に機能していたか、否かを展望することとしたい。

## ２、会沢正志斎の洋学観

会沢正志斎の「西洋」に関する関心は日本の独立を保たねばならないという危機感によったものである。文政七年（一八二四）五月、水戸領大津浜にイギリス船員が上陸した際に、会沢は臨時の筆談役に任命されて、直接異人と筆談した経験がある。この経験に刺激された会沢は「慷慨悲憤し、自ら已む能はず、敢へて国家のよろしく恃むべきところのものを陳ぶ」[4]という心境の下で、翌年三月に『新論』を著わしたと言われている[5]。

会沢は「天下有志の士、将た安んぞ興起奮励して心力を尽し、身体を齏粉して以て之を攘はざるを得んや」[6]というように、志士の奮起を呼びかけ、強固の攘夷論を打ち出した。しかし、「西洋」に対してかかる危機感を抱えている会沢であるものの、彼は洋学を一方的に排斥するわけではない。それについては、次の史料から伺える。

> 西夷の書を読み、万国の形勢を審かにし、火器・船制等の利を暁り、以て国家の用に供するは則ち可なり。而して其の究理の論、邪教の説等は、則ち決して杜絶せざるべからざるなり。[7]

ここから、会沢は洋学には「利」と「弊」との両面があると捉え、彼の洋学に対する排斥が「究理の論」と「邪教の説」の二点に限っていることが読み取れる。また、彼は洋書を通して世界諸国の形勢や、大砲・大船をはじめとする先進的な武器のメリットを知るようになり、このような「利」が国家に役立つものであると考えているこ

とがわかる。

では、彼の言う洋学の「利」と「弊」とは具体的にはどのようなものであるかを見てみよう。

### （1）洋学の利

まず会沢が説いている「万国形勢」の把握と「火器・船制の利」についてである。

会沢は世界諸国の形勢について次のように捉えている。

> 人文漸く開けたれば、すなはち夷狄なるものもまた漸く条教を設け規制を立つるを知り、その高城深池は、古の穹廬にあらず、鉅礮大艦は、古の騎射にあらず、回回・邏馬の教法は、古の威もて駆け利もて誘ひて麕のごとく至り鳥のごとく散ずるものにあらず、おのおの一方に雄拠し、合従連衡して、宇内を挙げて一教に帰せしめんと欲し、また水草を逐うて転移するの類にはあらざるなり。故に古者、一区の中に就きて、分れて戦国となりしが、今はすなはち各区に並立して、こもごも戦国となれり。[8]

つまり、会沢は「夷狄」たる西洋諸国も文明が開化し、秩序が成立し、巨砲戦艦の発明によって防御力と戦闘力を大幅に増強し、「夷狄」諸国が敵対関係を設けて「合従連衡」して領土を拡張し、諸国の形勢が「戦国」同様であると認識している。西洋諸国間の敵対関係については、会沢はさらに次のように詳しく述べている。

> 方今戦国にして、その回教を挾みて以てその兵を強くしその地を広くするものは、莫臥児・度爾格なり。而して度爾最も張る（中略）鄂羅斯のごときも、また嘗て仏郎察等と肩を比べ、熱馬に役属せしも、近時に至りては、すなはち猖獗特に甚しく、新たに至尊の号を称し、その地は諸国の東西を包ね、神州の東北に綿互し、毎に度爾と雄を争ふ（中略）百児西は嘗て衰乱せしが、鄂羅ためにこれを興復し、兵を合せて度爾を撃破す。百児亜と鄂羅と合すれば、すなはち度爾はその左臂を断つ（中略）西方、釁あれば、すなはち百児と与に度爾を図り、もしよくこれに克てば、すなはち南して莫臥児を襲ひ、満清と準葛爾の故地を争ひて、長駆して清に臨み、すでに清に克つことを得れば、すなはちまさに連艦して以て神州に偪らんとす（中略）彊を保ち辺を安んずる者、豈に古今の形勢の変を審らかにして、これに応ずる所以の術を求めざるを得んや。[9]

この論述から、会沢は西洋諸国の勢力を把握し、諸国間の敵対関係を明らかにすると同時に、西洋諸国と日本との敵対関係にも注意を払い、ロシアの領土拡張に対して特別に警戒心を示していることが読み取れる。さらに彼は西洋諸国が清国に臨んだ後、連合して軍艦で日本に攻めてくることを予測し、日本の独立を守るためには、古今形勢の変化を理解した上で対策を考えなければならないとしている。会沢のこのような諸国形勢に対する分析は、もっぱら日本の保全という前提で説かれたものであるゆえに、彼における「万国形勢」の把握もこのような軍事的戦略的な視点だけであり、西洋諸国の風土人情・制度沿革に対する関心は後退したのである。

このように、洋学を通して西洋諸国の形勢、特に西洋諸国の軍事力及び諸国間の敵対関係を把握し、日本の独立を守るための情報を獲得することができるという点は、会沢の説いている洋学の「利」の一つである。

もう一つは「火器・船制の利」であるが、それについて見てみよう。

会沢は巨艦・大砲の必要性について、次のように認識している。

> 小船を用ひて以て巨艦を摧くは、一時の戦略にして、主将の方寸に在り、これをその人に付すべくして、防海の規制を画する所以にはあらざるなり（中略）火器もまた虜の長技にして、我の恃みて以て虜を制するところにあらざるなり。然れども大礮の用は、堅を摧く所以にして、攻城守城に在りては、必ず闕くべからず。（中略）もし敵をして独り善くこれを用ひ、我の以てこれに応ずるなからしめば、すなはち兵刃未だ接せずして、三軍まづ讋れ、何ぞよく闘はんや。[10]

ここでは、会沢はまず小船で巨艦を制圧することは得策ではないという現実的思考から、自国と西洋諸国（敵国）との武力を客観的に把握している。「火器」は敵国の長所で必ずしも自国の頼るところではない。このように自国の短所を素直に認めた上で、会沢は大砲が戦において攻める際にも守る際にも欠けてはいけない武器である以上、敵国が独りこれを持っていて自国に揃わなければ、戦に入る前に兵士が懼れると考えている。したがって、巨艦・大砲を揃えることは、まず会沢が戦略的思考から得た第一対策である。

具体的には、巨艦について会沢は、

> 「邦国に賦して、巨艦を興造せしむべし。その工役は軍令を以て事に従はしむ（中略）事なければ、す

なはち以て天下の米穀及び諸物を運び、羅糴の権をして上に在らしめ、邦国をして給を商賈に仰がざらしむ。然る後に歳時を以て訓練教閲し、以て虜を海上に截つに足らし」[11]

と説いている。つまり、彼は巨艦を製造することを主張し、実際の実行を軍役を通じて実現できることを望んでいる。そして、巨艦は対外防御に限らず、平時には国内の商品流通にも役立つことを期待し、非常時に敵を撃退できるように普段訓練しておくことを必要とするのである。

また、巨艦の製造は士気にも繋がると会沢は次のように説いている。

邦国をして大いに巨礮を鋳造し、士卒をしてよく用法に通暁せしむるにあらざるよりは、すなはち以て天下の気を壮んにするなくして、所謂利器なるものも、また以て国を守るの用となすに足らざるなり。[12]

要するに、巨砲を鋳造し、兵士に操縦できるようにさせることは「天下の気」を盛んにすることに繋がり、国を守ることの前提であると会沢は捉えているのである。会沢は同『新論』「守禦」策の中で、「必ず士風を興すを首とす、その義を以てして天下を率ゐんと欲せばなり」[13]と述べたことがある。つまり、先進的な武器を保有することによって「士風」を高揚させるは、「皇統綿々たる神武之邦」たる日本を守るための第一歩であり、「国体」保全の「大義」に直ちにつながるという考え方である。

ゆえに、会沢は「攻銃は以て賊艦を摧き、守銃は以て港罍を扼し、戦銃は以て馳突に備へ、及び他の火箭・噴筒・火桶・火磚の類の、およそ銃と相参用する所以のものは、よろしく衆人をして習熟せし」[14]めることを提唱し、西洋の先進的な武器と軍事技術で、日本の武力を増強させることを主張するのである。

このように、会沢は「力」に劣る立場に立っている日本は、侵略されないようにするために己の力を高めるしかなく、伝統的な弓槍では西洋の戦艦と戦えないと考えている。彼の説く「洋学の利」の背後には、西洋の先進的な軍事技術に習うことが自然に想起され、戦わなければならない「西洋」でありながら、習わなければならない「西洋」でもあるという彼の心境が伺える。

### （2）洋学の弊

会沢が説いている洋学の弊は「究理の論」と「邪教の説」との二点であることは前述したが、具体的にどのようなものであるかを見てみよう。

会沢は西洋の自然科学知識について、次のような考え方を抱えている。

多くは宋儒窮理の名を假りて、以て世俗を欺く。一草一木も、皆就いて其の理を窮む。遂に言ふ、天に幾層あり、日日の形状云々、列星の形状云々と。而して一も人事に関する者なし、専ら天地を視て死物となし、徒に其の形状あるを知りて、精神あるを知らず、天地の理は此の如きのみと謂ひ、而も未だ嘗て陰陽・鬼神の活動・変化、測られざる者あるを知らざるなり。是を以て天命の畏れざるべからず、鬼神の敬せざるべからざるを知らず。聖人の神道、教を設くるの理と相氷炭す。[15]

つまり、世の中の洋学者は、万物の理を究するという宋儒の主張を借りて、「天」・「太陽」・「星」を単なる物質として見、その形状・構造だけを研究し、天地万物に存在している「精神」・「天人相関」の道理を知らず、「陰陽・鬼神」の論理をおろそかにしている。洋学は「聖人の道」を抵触する学問であり、西洋が説いている自然科学の道理と聖人が説いている天地自然の道理とは氷炭の関係にある、と会沢は捉ているのである[16]。

『迪彝篇』の中でも、会沢は同じく、

「西荒の蛮夷は小智にして、天の神道を知る事あたはず。人巧を以て天地を測り、日月を図画し、徒に天地の形体を論じて、陰陽の妙、心性の活動を知らず。譬へば人の肌膚毛髪の微を論じて、性情ある事を知らざるが如く、其の説細密なりとも、人事に益なし。天地を視て死物として是を翫ぶは、天を慢る也」[17]

と述べている。要するに、西洋の自然科学知識は、「天道」と「人事」とを分離させ、自然万物をただ一研究対象（「死物」）として捉え、天地の外形が形成された原理を論じるが、天地における「心性の活動」や「性情」の由来を解釈できない。このような洋学知識は、いくら精密であっても人間社会には「益なし」と会沢は批判している。

さらに、このような洋学知識が洋書の出版などによって広がることも会沢の警戒するところである。会沢は次のようにその警戒心を表している。

近時また一の蘭学なるものあり。その学はもと訳官より出で、阿蘭字を読みて以てその語を解するに過ぎざるのみ。もと世に害あるものなし。しかるに耳

食の徒は、西夷誇張の説を謬り聴き、盛んにこれを称揚し、或は書を著して梓に上し、夷を以て夏を変ぜんと欲する者あるに至る。及び他の珍玩奇薬の、目を奪ひ心を蕩かす所以のものあり、その流弊もまた人をして反つて夷俗を欣慕せしむるに至る。異日、狡夷をしてこれに乗じて以て愚民を蠱惑せしむれば、すなはちそのまた狗羯羶裘の俗に変ぜらるるも、たれか得てこれを禁ぜんや。[18]

ここでは、会沢は、通詞をはじめとしたオランダ語の習得はそもそも「害」のないことであるが、世の中には洋学の説を盛んに称賛して書を著して洋学を広げようとする人もいるため、これらの人が「夷」説を普及させることによって「夏」(「日本」) を変えようとすると恐れている。すなわち、洋学の内容が広がり、洋書が出版されるにつれて、「夷」の科学知識・風俗人情が徐々に「民」に知られ、その新奇な内容は「民」を慕わせ、「民」を蠱惑するため、日本国中の風俗人情が一切「夷」風に変ぜられ、「国体」の根幹が動揺されるという。この「民心動揺」の点にこそ、会沢が洋学を禁止する理由があることがわかる。

そして、会沢の「邪教の説」への批判も、この「風俗」移転の点と関連することが推測できよう。会沢はキリスト教について、次のように反対している。

夷虜は禍心を包蔵し、日に辺陲を窺伺して、邪説の害は内に稔り、百端の窮りなきことかくのごとし。夷狄を中国に養へば、天下嗷嗷として、民に淫朋あり、人に比徳あり（中略）今、虜は民心の主なきに乗じ、陰かに辺民を誘ひ、暗にこれが心を移さんとす。民心一たび移らば、すなはち未だ戦はずして、天下すでに夷虜の有とならん。[19]

ここから、会沢のキリスト教流入に対する緊張感が読み取れる。つまり、キリスト教は日本で広がれば、「民」に悪徳が生じ、「民心」を統御するものが失われ、「民心」が「夷」俗に移った結果、日本は戦わずに「夷虜」に取られる、と会沢は考えているのである。このように、会沢にとっての洋学は、西洋諸国伝教の手段となり、そしてキリスト教の伝播は単なる日本を侵略する手段となるのみなのである。

以上述べたように、異国船の接近をはじめとする危機意識によって、会沢は「西洋」に関心を持つようになった。会沢は洋学を通して、諸国の実力の強弱、諸国と諸国または諸国と日本との敵対関係を把握できるようになると考え、西洋諸国の強大な軍事力、先進的な軍事技術を認め、それに習うことによって日本の武備を増強させることを主張している。会沢は、オランダ語の習得をはじめとする洋学の技術面を認めるが、洋学の自然科学・宗教については日本の民を蠱惑するものだと考え、警戒を示しているのである。

しかし、会沢におけるこのような洋学排斥はどのような論理によって支持されているのか。会沢が説いている天地の「精神」、「天地の理」とは具体的にどのようなものであるか。換言すれば、会沢において「西洋」と日本とは異質のものであるが、その異質性はどこに由来したのか。この問題について次章において検討したい。

## 3、会沢における「西洋」と日本との異質性

### (1) 日本の優越性

会沢は日本の地理的位置に関して、次のように把握している。

東方は神明の舎なり。太陽の生ずる所、太陽は地を繞り、圓転して端なし。然れども瀛海の浩瀚は、最も東洋を大となす。而して神州は之に正面し、首に出日の光を受く。其の東荒諸国（夷はこれを米利幹と呼ぶ。）の東海に瀕する者の如きは、則ち大勢、西荒（夷はこれを欧羅巴と呼ぶ）の西と相接続する者にして、日出の方と称するに足らざるなり。[20]

ここでは、東方を中心とする、さらに言えば日本を中心とする会沢の宇宙観と地理観とが伺える。要するに、東方は太陽が昇るところに位置し、「出日の光」を受けている。その中、さらに日本はもっとも最初に太陽の光を受けられるところに位置している。それに反して、西方は「日出の方」とは言いがたく、アメリカもヨーロッパもこのような地理条件に恵まれていない。このような会沢の捉え方は、「太陽は地を繞」るという伝統的な地球中心説によるものであるが、会沢が西洋の天文知識をも熟知することが彼の洋学批判から推測される。にもかかわらず、彼は伝統的宇宙観を固守している。この固守は彼が説いた「天の精神」に拠ったものであり、それについて会沢は次のように説いている。

東方はその首にして、西方は足なり。首は貴く、足は賤しきこと、自然の地形也。天道に在つては、東方は天日の照臨ます其の初にして、陽気の発する所、万物の生ずる所なり。其の人民も朝気の鋭きが如く、春気の発するが如し。風俗勇猛にして、和楽愷悌の気象あり。西方は天日の光りをかくし給

ふ所にして、陰気の凝るところ、万物の滅する所也。其の人民、暮気の衰ふるがごとく、秋冬の枯落するがごとし。風俗残忍にして、陰険深刻の気象あり。[21]

その大意は、「先に太陽の光に当たる東方は『首』に相当するがゆえに尊い。それに対して、後に太陽の光に当たる西方は『足』に相当するがゆえに卑しい。東方は太陽に『照臨』されるがゆえに、『民』を含めた自然万物が『陽気』を受けている。そのため、東方の『民』は壮健で勇猛であり、人倫も和楽する。それに反して、西方は太陽の光に当たらないため、『陰気』が凝集し、『陰気』を受けた『民』は元気がなく風俗も残忍である」ということである。

すなわち、会沢が説いている「天の精神」=「天道」とは、「天の建つる所、人の由る所、之を道と謂ふ」[22]といった、天地自然の現象と人間社会の秩序とが連続するという「天人合一」の捉え方である。この捉え方が発生した論理については後述に譲り、ここでは、会沢が同じく東方に位置する漢土と日本とをどのように区別して、日本に優越性を与えたのかを見てみよう。

東方と西方とはそれぞれ「陽気」と「陰気」とを受けていると考えている会沢であるが、彼は「神州は漢土と、朝朝に向つて尊位に当る」[23]といったように、この論理によって中国と日本との地理的優位を浮上させることで、西方を相対化したのである。

そもそも会沢は、「天道」が漢土と日本との両方に存在すると捉えている。彼は、

「漢土も亦東方に在つて神州と相比隣し、神州に亜いで東海に臨む。其の教は人倫を明らかにするにあり。この彝やこの訓、帝においての訓あり。天朝神明の訓を垂れ給ふ所以の者と期せずして相同じ（中略）而して地勢も亦唇歯を相為す」[24]

とみなしている。つまり、漢土は地理的位置から言えば日本と「比隣」し、日本に次いで東に向かっており、「地勢」上において日本とは「唇歯」輔車の関係にあり、漢土の教える事柄も「人倫」を明らかにすることにあるため、日本の「神明の訓」と一致していると考えている。したがって、彼は「天道」を明らかにするためには、

「天下、有志の士ありて、苟も斯の道を天下に明らかにせんと欲せば、必ず当に小異を兼ねて大同に合し、而して天祖の彝訓を挙げ、堯舜・孔子の名教を述ぶべし。二者並びて行はれて相悖らず、然る後、能く天の建つる所、人の由る所の者全うせん。迺ち之を道の純を得たる者と謂ふも可なり」[25]

といったように、「天祖の彝訓」と「堯舜・孔子の名教」とは多少の差異を有しながらも、その大部分が同様であり、お互いに相反しないため、「天下の道」を明らかにしようとする人であれば、両者を並べて進めることを通してこそ「天人合一」の道の真を得ることができると唱えているのである。

しかし、会沢において、このように漢土と日本とは「大同小異」であると捉えながらも、必ず漢土と日本とを平等視しているわけではない。会沢は万国の「至尊」として日本は唯一であると考え、具体的に日本が漢土より優れている根拠を日本の「皇統」の連綿性に求めるのである。会沢は日本の「皇統」について、

「神州は万国の元首にして、皇統二あるを得ず。万民を以て一君を奉ず、其の義は君臣の分を尽すにあり。而して漢土は則ち神州の弐にして、其の君臣一定不変なるあたはざること、猶ほ武将の下土を鎮撫し、代り興りて遞ひに替るが如きなり。故に三皇五帝の上古よりして易姓革命あり」[26]

と言っている。つまり、神州である日本は「万国の元首」として、その皇統が一定して変化したことがない。万民は、この連続した皇統を持っている「君」に奉公して、「君臣の義」を尽くす。それに反して、漢土における「君臣の義」は「一定不変」のものではなく、「三皇五帝」の上古時代から王朝の交代が絶えず、易姓革命が続出していた、と会沢は考えているのである。

このように、会沢にとって、日本の皇統には絶対連続性・確乎不動性があるため、日本は漢土を抜けて最優位に位置づけられるのである。会沢の中では、このような国と国との「秩序」関係と表裏に、「臣」の「君」に対する絶対不変の忠義が存在している。したがって、彼は孟子の放伐説に対して、「天朝は則ち君臣の義、天地と並び立ちて易ふべからず」、「人臣をして之を聞かしむべからざる」という態度をとっているのである。

かかる原理の下、会沢においては東方は西方より優位に付けられ、さらに日本は東方の中においてもっとも尊位に位置づけられるのである。このような「皇統」の連綿性により裏付けられた中国を上回る優越性は、会沢が「西洋」と日本との異質性を強調するための根拠の一つである。

（2）「天道」とキリスト教との対峙

それでは、会沢が説いている「天道」、「天地の精神」とは、具体的にどのようなものであるか。また、それらと西洋とはどこにおいて異なるのかを見てみよう。

「天地の理を言ふ時は、則ち聖人は大易に於いて之を発す。太極の両儀を生ずるや、天に在りては則ち陰陽たり。地に在りては則ち剛柔たり、人に在りては則ち仁義たり。而して其の変動して息まざる者は、則ち之を神道と謂ふ」[27]

と会沢は言っている。すなわち、聖人は「易」に基づいて天地の理を説いている。宇宙の生成原理において、天・地・人は単に物質的な存在ではなく、天に「陰陽」、地に「剛柔」、人に「仁義」の精神が存在し、これらの精神は固定せずに「変動」するものである、と会沢は考えている。さらに、

「人は活物なり。仁義の性情の活動する者なり。故に人道を言はゞ之を仁義に求めて可なり（中略）天地も亦活物なり。陰陽剛柔は天地の精神にして、其の活動せる者なり。天地の道は当に之を陰陽剛柔に求むべ」[28]

きである、と会沢は考えている。すなわち、天・地・人自体も変化していく「活物」であるため、天・地・人を論じる際は、西洋のように「死物」の性質を持った物質の面のみに注目するのではなく、天・地・人の「活物」の性質を反映する精神の面に求めるべきである、と会沢は説いているのである。また、会沢においてはこのような天・地・人の「精神」を「五倫五常」によって表現され、「天に事ふること親に事ふるが如く」[29]、「仁の実は親に事ふること是れなり」[30]とあるように、「天人相関」の理を「敬天の実」を通して表現され、「仁義の人道」を通して実現できるのである。

これらの史料からわかるように、会沢においては「天地の理」における理というものが「易」（「太極」）に基づいてはじめて成立し、「天人相関」の「道」が「仁義」の「倫」という具体的な徳行を通じて人間社会に要求されている。それに対して、西洋の自然科学においては、天地はただ実体がある具体的な存在であり、物質性はあるが精神はない。人もただ進化論に従う生物的個体的存在であり、「天命」を受け継いで天に従って行動するものではない。ゆえに、洋学者が「宋儒の窮理」という方法論を通じて西洋の科学原理を受け入れようとしても、聖人の伝統における「理」と西洋における「理」とは元から異なっていて混同できないため認められないのである。

ここから、会沢が宇宙生成の原理から西洋の「理」と「天地の理」との異質性を明白に把握し且つ堅持することが伺えるのである。そして、会沢におけるこの異質性への堅持は、西洋の科学原理という学問分野にとどまらず、西洋の社会基盤を支える宗教まで指向し、聖人の「活物」観と抵触するキリスト教の「天国地獄説」を厳しく批判するのである。

キリスト教について、会沢は次のように批判を加えている。

東方の教は、生々を以て道となす。生は人の喜ぶ所、其の喜ぶ所に順ふ。故に其の俗は和楽愷悌なり。西方は則ち寂滅を以て道となす。滅は人の悪む所にして、嚇すに其の悪む所を以てす。[31]

蛮夷寂滅の言、民心を蠱惑して、其れ人倫を廃業す（中略）洋夷の説の如きは、其の言、四海に偏満し、積陰の気、天地に塞がる。[32]

この二つの史料から、東方は「生」を道として、人の喜ぶ所に従って「和楽愷悌（がいてい）」の風俗が形成され、教える事柄も「仁義礼智信」の大典によるが、西方は「寂滅」を道とし、「死滅」は人の憎む所となるため、「洋夷」の説が「積陰の気」を世界に満たして「天地」を防ぐことで「民心」を惑わし、「人倫」を廃業するというように会沢は捉えていることがわかる。

キリスト教の反「人倫」的内容を詳しく見れば、「戎狄は大道を知らざれば、父祖の外に前身あり、子孫の外に後身ありと思ひ、父子の間をも肉身の假合などいへる説ありて、其の甚だしきに至りては、我が父をば小なる父なりといひ、其の尊奉する所の夷狄の神を大なる父と称する類の邪説」[33]であるというような、父子関係を単なる肉親関係に限ったもの、ゴッドを父として尊奉するものであり、「二色を禁ずといふ事、西戎の俗にして、国王と雖も一夫一婦に限りて、外に妾媵を蓄ふる事を許さ」[34]ざるというような、男女平等・一夫一妻制のことであると会沢は例証している。

しかし、社会倫理は、そもそも会沢においては「天道」に裏付けられた天皇の絶対性と表裏一体の秩序原理である。その内容は次の通りである。

昔、天祖統を垂れ、天孫位を嗣ぐ。授くるに三神器を以てし、誓つて曰はく、宝祚の隆なること、当に天壌と與に窮りなかるべしと。而して之を千万世に傳ふ。臣民、未だ嘗て一人の天位を覬覦せし者あらずして、君臣の義、以て立つ。宝鏡を持して祝して

曰く、以て吾が神となし、これを視ること、猶ほ吾の如くせよと。而して日胤は遺体を鏡中に仰瞻し、本に報い孝を申べ、千万世に至つて、享祀して懈らず。皇統一定して、未だ嘗て他派異流の敢て天潢を瀆したるものあらず。而して父子の親、以て大なり。男唱女和の義は、太初に見ゆ。而して夫婦の別、以て明らかなり。伊弉諾尊・伊弉冊尊、相会するや。陰神、先づ歌を唱ふ。陽神、悦ばすして曰はく、吾は是れ男子なり。理、当に先唱すべし。婦人の先に言ふは祥なしと。遂に之を改めて唱ふ。三貴子の職を分つ事、長幼、以て序す(中略)群賢、天功を亮け、同寅協恭、明友以て信ず。[35]

すなわち、「天皇は天から位を継ぐことを『千万世』に伝え、よって『天位を覬覦せし者』が一人もおらず、よって『君臣の義』が自然に行き届く。歴朝の天皇が『宝鏡』という神器を見ることを通して先祖の遺影を崇拝し、『享祀』という形式を通して孝行を尽くし、よって『皇統一定』して『父子の親』が自然に行き届く。また、天地開闢後、国が生まれた際に、陰神の『伊弉冊尊』が陽神の『伊弉諾尊』に付随して唱えることによって、『男唱女和の義』＝『夫婦の別』が行き届く。『三貴子』にそれぞれの職を与える事によって、『長幼の序』が行き届き、諸神が『同寅協恭』して『天業』を助けることによって『朋友の信』が行き届く」ということである。会沢は、『日本書記』を拠り所に天皇の正統性と神聖性を示すと同時に、五倫五常こそ元来日本に固有している社会秩序であると強調するのである。

このような「天道」とキリスト教との異質性が会沢にもたらしたのは、何よりも「民心一たび移れば、簞壺相迎へ、これを得て禁ずるなし」[36]といったような「民心」の移転・動揺に対する恐怖・警戒である。彼は「民は胡神のために死を致し、相欣羨して以て栄となし、その勇は以て闘ふに足る。資産を傾けて、以て胡神に奉じ、その財は以て兵を行るに足る。人の民を誘ひ人の国を傾くるを以て、胡神の心に副ふとなし、兼愛の言を仮りて、以てその呑噬を逞しくす」[37]るということを恐れる。「民心」が一旦キリスト教に向いていけば、ドミノ倒しのようになり、阻止することができない。「民」がキリスト教の神のために命さえ顧みず、お互いに教徒になることを羨み、資産を惜しまずにキリスト教の神に奉じるようになれば、外敵と戦う意志・力量が衰え、強兵に用いる財産がなくなる。西洋の宣教師が墨子の兼愛思想を通じてキリスト教の「博愛」を説くのは、人民を勧誘してゴッドに心をつき従わせ、よって日本を侵略することを企んでいるためであると会沢は結論を付けている。

以上述べたように、会沢においては、陽尊陰卑にそれぞれ日本と西洋諸国が当てはめられ、優越たる国体を持っている日本と天地の道を廃業する西洋諸国とは完全に区別されている。「天地」を単なる物質として見、父子関係を遺伝学的に肉親であるとしか考えられないように、西洋の自然科学原理が「天」と「人」とを分離させた上で成り立っている。よって日本の国体を保持するために、会沢は洋学の自然科学と宗教とを警戒し排斥するのである。

しかしながら、会沢の攘夷論は前述したような「死地に置きて後に生くるもの」であることは忘れてはいけない。攘夷論の提唱はあくまでも「億兆心を一に」するための人心統合手段であり、「天下を必死の地に置き、然る後に防禦の策は得て施すべき」[38]であるという理屈によったものである。かかる国の存亡にかかわる危機意識の下、会沢が第一義とする課題は、いかに国を増強させて西洋と戦いうるようにするか、ということである。戦闘力を短期間において高めるためには、西洋式の武器を導入するのがもっとも情勢に符合する方法であり、会沢が西洋の軍事技術を導入しようと主張するのも、このような現実的防御の課題を前面に思考した結果である。ゆえに、会沢の洋学態度の背後には実質的に洋学の技術と原理との分離が発生し、会沢は西洋の自然科学の成果を利用しつつも、その科学成果を支えた自然知識・科学原理に対しては理解しようとしないのである。

それでは、最後にこのような会沢の技術導入の主張はどのように採用され、彼の西洋文化受容の態度はどのように反映されていたのかを見てみよう。

## ４、水戸藩の藩政改革

会沢は水戸藩九代藩主徳川斉昭のブレーンの一人として、西洋軍事技術の導入をはじめとする主張が受け入れられた。彼の洋学観、西洋文化受容の態度は斉昭に影響を与え、直ちに藩政改革に反映されていった。それを、西洋文化受容と関係のある藩政改革及び斉昭の政見を通して見ることとする。

### （１）洋式武器の製造と軍制改革

天保十年（一八三九）七月、水戸藩矢倉奉行宛の斉昭達書の中に、「異国船渡来之節為松川御加勢御指出之大砲此度御改にて、三百匁玉御筒三挺西洋法車仕掛ケ」[39]るという内容がみられる。異国船渡来という非常時に備えて、現存の砲を西洋法に倣って改鋳するという斉昭の意図が明らかに読み取れる。実際に斉昭は、洋学者を招聘して西洋の砲術書を和訳させ、反射炉の建設にも彼ら

を加えて銅砲と鉄砲を鋳造させるなど、洋式大砲の鋳造・改鋳に改革の力点を置いたのである。この天保年間に水戸藩で鋳造した大砲はペリー来航後、うちの七四門が幕府に献上された。

天保軍制改革の中で、斉昭がもう一つ力点を置いたのは、言うまでもなく大船の建造である。天保九年（一八三八）六月、在水戸家老宛達書の中で、斉昭は「大船出来候様相成ハ諸民不幸をのがるべきになん」[40]と言い、大船建造は「諸民」を不幸から救うために必要な物であると唱えている。

この大船建造の主張が具体的にどのようなものであるか、斉昭は、同年将軍宛の上書「戊戌封事」の中で詳しく述べている。次のようなものである。

> 一神国ハ四面皆海に候へバ、海船の製作心を用ゆべき事御座候（中略）日本人ハ海国に生れながら、十里二十里の海上さへ、日数を定め乗候事ハ出来不申のみならず、少しく日より風波悪敷候へバ、破船いたし、其時々船中の米穀諸品空しく海中のもくづと相成、甚しきに至候ては、漂流又ハ溺死人出来候（中略）海上にて出遭候へバ、異船へ近よりあやまり候歟にげ延候外無之、扨又夷狄陸近く乗来乱妨等いたし候。迚も此方にて船を出し追かき候事不相成候故、いよいよ異人共に侮られ申候されバ、堅固の大船作り候義を御免被遊候へバ、海防の為にも宜くいかばなり歟。人命もたすかり、有用の荷物海中へしづめ候患も相止、広大の御仁政に可有御座候。尤も国々により大船の員数を御定め、又ハ決して異国へ渡り不申様御制禁等之義ハ、如何様にも御仕法可有之奉存候。[41]

ここで斉昭は、日本の島国という地理的位置から、国内の商品流通における破船や異国船接近の現状を把握していることがわかる。各藩が大船を保有できないため、破船による商品の損失、人の漂流・溺死が頻発し、「夷狄」が乱暴を犯してもそれを追いかけることができない。反面、大船が建造できれば、海防のためにもなり、人命も助かり、商品の損失も免れる。斉昭が大船建造の解禁を求めるのは、これらの現実的問題から出発したことがわかる。実際に、斉昭は蘭船に擬して軍艦の模型を試作し、大船解禁の時期を待っていた。

この上書の最後において、斉昭が各藩大船の保有数量の制限、外国への渡航禁止も同時に提起していることを看過してはいけないであろう。その背後に、鎖国体制への堅持や幕府権力集中の維持、秩序の変革はあくまでも幕藩体制の枠内において発生する行為でなければならないという斉昭の心境が伺える。

洋式武器の製造のほか、斉昭は軍制の改革にも着手した。斉昭は軍制を銃隊組織に改正しようとし、天保十二年（一八四一）水戸藩士を江戸に遣わして高島流西洋銃陣を学ばせ、同藩士が帰藩後、藩内において高島流砲術を教授するようになった。その様子は次の水戸藩士土部則勝天保十三年（一八四二）の手記から伺える。

> 養父六衛門御牀几廻へ高島流砲術伝授可致命ニより、同氏屋敷内ニて伝授致候趣き（中略）其号令ハ皆蘭語ニて、たとえバ肩へ筒と云うを（スコトドル）うてを（ヒュール）等と呼び候よし。其後、此法を練習したる御牀几廻の一隊を召され、御城内ニて御上覧あり。是より彼是折衷斟酌遊バされ始めて、大極陣の新法を発明なされ（後略）[42]

この史料から、藩士土部勝全が高島流砲術を習った上、藩内において伝授の実践にあたり、西洋鉄砲を教授する際の状況がわかる。砲術訓練の号令までオランダ語で行うこと、さらに訓練の成果を藩主の前で披露していることから、先進的な西洋式砲術をマスターした藩士の自負心が読み取れる。加えて、斉昭の軍制を一新する決心も伺える。土部はさらに砲術の和洋折衷を行って「大極陣」という新しい砲術を発明し、この「大極陣」は後に全藩の軍事訓練の内容となるのである。[43]

しかしながら、訓練の号令までオランダ語で行うことは、既に会沢が主張したような技術面に限っての洋学摂取を越えた傾向があり、ゆえに会沢は、「銃陣論」の中で次のように彼の緊張感を伝えている。

> 銃陣ノ法、号令ヲ詳密ニシテ一斉ニ発放スルハ其利アル所ナレドモ、衣服言語動作皆蛮人ノ態ヲナシテ、神州ノ国体ヲ失フハ其害大也（中略）今筒袖ヲ着テ号令ニ蛮語ヲ用、坐作進退皆蛮人ニ擬スルハ即チ蛮服ヲ服シ蛮語ヲ誦シ蛮ノ行ヲ行フナレバ、是神州ノ兵卒ヲ尽ク蛮人ニスル也、蛮人ヲ防ントテ先ツ自ラ蛮人トナル、己カ旗指物ヲ抜棄テ、敵ノ合印ニ変スルカ如ク蛮人ノ隷属ニ等シ、無職ノ甚キニ非ヤ。[44]

ここでは、会沢は号令で銃陣を訓練することに効果を認めるが、「衣服言語動作」まで「蛮人」の真似をすることは「神州ノ国体」を損害することであり、「蛮服」を着用し号令を「蛮語」で言いだし、「坐作進退」皆「蛮人」のように模倣すれば、「蛮人」と戦いうるための軍事訓練でなくなり、自ら「蛮人」となって敵陣に隷属するに等

しいことになると憂慮している。服装・言語をはじめとする異国の風俗人情関係のものであれば、できる限り避けたいという会沢の態度には、前述した彼の「民心」移転の憂慮が如実に伝わるのである。

### （2）洋学生の養成と洋学規制

洋学からは海外事情・情報を得ることができ、洋式武器の製造や軍制改革にも役立つため、斉昭は藩政改革において洋学者の招聘や洋学生の養成にも力を入れていた。

安政元年（一八五四）七月、藩政の中心人物である藤田東湖は「夷狄防御之急務彼を知我を知候儀肝要候処、彼を知候は蘭学之外無之、先年青地林宗秦崎鼎御召抱に相成候へ共、両人とも不幸にして子孫も無之僅に一の鱸半兵衛少々蘭学心懸候位にて至て御手薄に候間、是非蘭学生両三人も御召抱被遊度候」[45]と言い、青地林宗らの洋学者が水戸藩を去った後における藩内の洋学者不足の現状に対して、新しく招聘しようと説いている。翌年の安政二年（一八五五）十月、「此度被仰付候洋学修行之儀、学科多端に可有之候処、攻代守禦之術を始、航海地理歴世之治乱各土之人情形勢等其他事務に関係致候実用之儀を専務と致し、万事有用之儀致講究候様相心得、諸事申合修行可被致候」[46]という洋学者宛の達書が下り、藩当局は洋学生に命じて、進攻・守禦、航海地理知識、人情形勢をはじめとする洋学の実用的科目を選んで専攻・修行させるのである。

当然このような洋学許容は一定の範囲内に限ってのことであり、ゆえに東湖が「蘭に僻し候へば其害も少」からずと憂慮しているように、藩当局もこの「洋学修行者宛達書」を出す前、弘道館教授頭取に対して、

> 「此度洋学者御下修行被仰付候処、近来洋学追追流行に候処、後年に至り大害を生し可申候間、於御家は人別を極メ修行被仰付、其外は一切修行不相成事に被遊且又修行人之義も神文為致可然候間、豊田彦次郎へも相掛候上神文前書取調早々御指出之事」[47]

との達書を達し、洋学が世の中で流行している環境の中で、藩内において選抜した藩士に限って洋学修行が許容され、それ以外の洋学修行は認めないという方針を示している。さらに洋学の普及は必ず後年に至って「大害」を生じると判断し、洋学修行一件に関して起請文の提出を要求するまで至ったのである。

にもかかわらず、水戸藩の洋学修行に対する警戒がおさまらず、安政四年（一八五七）五月、斉昭は弘道館勤務青山延光に対して、「蘭学之儀は、於弘道館中教授致させ度よし申聞有之候へ共、於同所横文字教授之儀は、我等申迄も無之、会沢青山とてもよろしくとは存申間敷候（中略）我等追々申候処、尚又会沢とも申談にて、弘道館中にては横文字教授之儀は止に相成候様致度（但し和解に相成候上の書は弘道館中へ入候ても不苦候）」[48]という内容の内諭を出している。藩校の弘道館において洋学を教授するのは不適切であり、翻訳関係の書物を弘道館内に持ち込むことは許容されるが、それ以外の洋学教授・伝播は禁止するという斉昭による洋学規制の意図がある。

既に前年（安政三年、一八五六）五月、斉昭は幕府に「国学第一漢学第二洋学第三」の建議を出していることも想起されたい。その論拠は次のようなものである。

> 国学にて我国開闢以来皇統連綿し上下之分正敷万国ニ比類無之尊き神国也と知り、我国之御為には其身を投げ義勇を励せ候も、是亦万国に勝れる大和魂有之故にて、此上如何程も国学は御引立無之ては天下の御為不宜候。漢土は文物盛に候得共（中略）たとへば漢土にて忠孝は君父に事る道なりと申義、唐人之君父に忠孝を尽し、我国の人は我君父に忠孝を尽し候教と相成候へば、禽獣之外は何国へも被用、漢土の学問致候は国学のたすけと相成候処、洋学は今日大小砲之事を初、天文地理総て窮理之事等、中ニハ用に足候義も有之申さば末事にて候。其人類薄情強欲無礼義は如禽獣候。然バ国学にて人心を定め漢学ニて道義を助け洋学ニて天文地理を明め船砲等之器械を造て我御国を守衛する助と致候事と存候。[49]

その趣旨は「諸士は国学の習得を通して日本が『皇統連綿』で世界諸国の『比類』できない『神国』であることを知ってからこそ、『国』のために、『天下』のために一身を投げて勇武を励む。日本の国体を支えた君父忠孝の秩序原理が漢土の学問と一致するため、漢学は国学の一助ともなる。しかし、洋学に至って、『大小砲』のような先進的武器をはじめ、『天文地理』から『窮理』に当たるすべての自然科学は役立つものもあるが、結局みんな『末事』であって取るに足らず、風俗人情に至ってさらに人情が薄く貪欲で『礼義』がない。ゆえに、国学で『人心』を定め、漢学で『天道』の理解を助け、洋学に対してはただ『天文地理』を明らかにし『船砲器械』を製造して国防に役立つほどにするだけで十分である」ということである。

斉昭の「天文地理」をはじめとする西洋の自然科学に対する姿勢は、会沢がそれを「天に幾層あり、日日の形状云々、列星の形状云々」とするものだけで「一も人事

に関する者なし」と批判するのと異なって、態度がやや和らいだとも読み取れるが、基本的には、この建議から斉昭は会沢の「国体」観や洋学態度に深く影響されたと言えるだろう。かかる斉昭の洋学警戒・規制から、キリスト教に対して彼が厳禁すべしと主張していることは言うまでもない。

安政二年（一八五五）九月、幕府に対して、斉昭は「耶蘇を尊び候書は勿論厳重御制禁にいたし度、拙家蔵本に破邪集と申書有之、右は明国有志の士邪教の害を患ひ、之を説破候書に候間、不苦候はゞ上木いたし天下へひろめ申度」[50]と説き、キリスト教を厳重に禁止することを主張し、明人の反キリスト教書籍である『破邪集』を翻刻することを幕府に建言している。

斉昭は、実際の政治担当者としての立場から、洋学がもたらした「害」、特に「民心」の移転をより一層警戒していたことが容易に推測される。ゆえに、斉昭の藩政改革の政策や幕府に対する政治主張を通して反映された会沢の洋学態度は、洋学分野での学問と政治との分離、技術と原理との分離にそのポイントがあると言える。同時に、このような分離が発生したからこそ、「道具」としての洋学の技術面が浮上してきたのである。

## 5、おわりに

周知の通り、「身体を齏粉して」「洋夷」を攘って「以て天地汚穢の気を一洗」[51]することを提唱した攘夷論者である会沢だが、日本が実際に開国された後、彼はかえって「今時外国ト通好ハ已ムコトヲ得ザル勢ナルベシ」[52]といったように、開国論を支持するようになったのである。会沢は

> 「外国ヲ一切ニ拒絶トイフコト、寛永ノ良法トイヘドモ、其本ハ天朝ノ制ニモ非ズ、又東照宮ノ法ニモ非ズ、寛永中ニ時宜ヲ謀テ設給ヒシ法ナレバ、後世マデ動スベカラザル大法トハイヘドモ、宇内ノ大勢一変シタル上ハ、已ムコトヲ得ズシテ時ニ因テ弛張アランコト、一概ニ非ナリトモ云難シ」[53]

と新たに唱えるようになった。すなわち、幕府は寛永年間から「鎖国令」を実行させて、「四口」以外の諸外国を一切拒絶することを通して日本の平和を守ってきたが、それは元来天皇朝廷が定めた制度でもなければ東照宮の定めた法令でもなく、ただ寛永の情勢に合わせて制定した、当時においての良法のみである。日本の内外情勢が一変した現在（開国後）に至って、日本を国際環境の中において考慮し、西洋諸国と通好することこそ日本の独立が守られる「明識」の措置である、と会沢は考えていたのである。これは、会沢が日本の情勢に基づいて判断した上での主張の転回であり、「時勢」に応じて適時適勢の手段を選択した結果であると言える。

このような「時勢」を優先的に考慮するというような素質は、会沢が西洋の先進的な軍事力に触れた際にも機能してくると推測できるのである。

本稿において検討してきたように、会沢は「西夷の書を読み、万国の形勢を審かにし、火器・船制等の利を暁り、以て国家の用に供するは則ち可なり」[54]と述べているように西洋の軍事技術を導入することに賛成しながらも、「而して其の究理の論、邪教の説等は、則ち決して杜絶せざるべからざるなり」[55]とするように、西洋の宇宙観をはじめとする自然科学及びキリスト教を厳しく排斥するのである。会沢においては、西洋の自然科学の成果を利用することは、その背後にある原理を明らかにした上での行為でなくとも良いのである。

会沢おける西洋文化受容は、「天地の理」と西洋の「理」との異質性を堅持した上、西洋の自然科学の成果＝先進的な技術を「道具」として使用することだけであり、日本の独立を守るという目的を達成するためにこの「道具」を導入し、よって日本の軍事力の向上を期待するものである。会沢にとってもっとも重要なのは、西洋の先進的な武器という「道具」、西洋の軍事技術という「手段」のみであり、この先進的な成果の背後にある原理的なもの＝西洋の自然科学に至っては無問責の態度を取っており、理解する必要がないと考え、むしろ理解しようともしなかったのである。

明治に入ってからの、西洋の自然科学原理と儒学の窮理との異質性を堅持した上での文明開化のルート（「和魂洋才」）を考えれば、技術の実用性だけを重視する会沢のプラグマティズム的な西洋文化受容のパターンが一定の有効性を持つ、という思想的展望を開いたと言えるであろう。

---

※本稿で扱った会沢正志斎の著作からの引用は、『新論』（『日本思想大系53　水戸学』、岩波書店、一九七三年）、「時務策」（同前）、『下学邇言』（『水戸学全集第二編　会沢正志集』、高須芳次郎編、日東書院、一九三三年）及び『迪彝篇』（同前）に拠る。なお、便宜上、引用の際に著作名、巻数、頁数といったかたちで出典を表記し、『新論』と「時務策」の句点は原文ママ、それ以外の句読点は筆者に拠る。

水戸藩関係の史料の引用は、『水戸藩史料』（吉川弘文館、一九七〇年）に拠る。引用の際に、史料名、巻数、頁数といったかたちで出典を表記し、句読点は筆者に拠る。

**注**

[1] 尾籐氏は、後期水戸学を「尊王攘夷思想の主要な源泉の一つであった」(「水戸学の特質」、五五七頁、『日本思想大系53　水戸学』解説論文、岩波書店、一九七三年)としている。この視点からの代表的な研究者は尾藤正英氏以外、遠山茂樹氏らも挙げられる。

[2] 沼尻源一郎編『水戸の洋学』(柏書房、一九七七年)。本書は大砲の鋳造、反射炉の建設、西洋医学の普及などを中心に、水戸藩における西洋技術の受容を考察したものであるが、史実に関する考察にとどまり、水戸洋学の思想性については触れていない。

[3] 星山京子『徳川後期の攘夷思想と「西洋」』(風間書房、二〇〇三年)。星山氏は、攘夷論者が「西洋」に「嫌悪感」を抱えると同時に、関心を惹きつけられる点から論述を展開した。会沢正志斎に関する章では、会沢のキリスト教観を中心に検討し、同観の幕藩体制イデオロギー維持における意味合いを問いたが、会沢における西洋文化受容の全体像が解明されていない。

[4] 『新論』、五一頁。

[5] 瀬谷義彦「水戸学の背景」、五二三頁(『日本思想大系53　水戸学』解説論文、岩波書店、一九七三年)。

[6] 『下学邇言』、二〇〇頁。

[7] 同前、三二二頁。

[8] 『新論』、八九－九〇頁。

[9] 同前、九一－九三頁。

[10] 同前、一二四－一二五頁。

[11] 同前、一二一頁。

[12] 同前、一二五頁。

[13] 同前。

[14] 同前、一二六頁。

[15] 『下学邇言』、二三三頁。

[16] 通常、近世後期の西欧諸科学研究を「蘭学」または「洋学」という名で呼んでいる。「洋学」と「蘭学」との区別については、「蘭学」は十七世紀のはじめ日本に渡来したオランダがもたらした学問という意味で呼ばれ、十八世紀後期「解体新書」の翻訳を契機としてはじめて本格的な西洋学術の移植・研究が始まり、中国在住のカトリック系の知識も「蘭学」の名の下に包括される。これに対して、「洋学」が「蘭学」に代わって一般化するのは幕末開港以降のことであり、この時期オランダ系学問のほかに、イギリス系・フランス系の学術も摂取・研究されるに至った結果である(杉本勲編『体系日本史叢書19　科学史』を参照、山川出版社、一九九〇年)。なお、本稿において論じる「洋学」はオランダも含めた西洋諸国全体の学問を指すため、「洋学」という呼び名で統一している。

[17] 『迪彝篇』、三五〇頁。

[18] 『新論』、六八－六九頁。

[19] 同前、六九頁。

[20] 『下学邇言』、一九九頁。

[21] 『迪彝篇』、三三四頁。

[22] 『下学邇言』、一九三頁。

[23] 同前、二〇六頁。

[24] 同前、一九九－二〇〇頁。

[25] 同前、一九八頁。

[26] 同前、二〇一頁。

[27] 同前、二三二頁。

[28] 同前。

[29] 同前、二三八頁。

[30] 同前、二四〇頁。

[31] 同前、二〇七頁。

[32] 同前、二〇〇頁。

[33] 『迪彝篇』、三六五頁。

[34] 同前、三六九頁。

[35] 『下学邇言』、一九五－一九六頁。

[36] 『新論』、九五頁。

[37] 同前。

[38] 同前、一〇七頁。

[39] 『水戸藩史料』、別記巻十五、一三七頁。

[40] 『水戸藩史料』、別記巻十六、二二六頁。

[41] 同前、二二七－二二八頁。

[42] 『水戸藩史料』、別記巻十四、九三頁。

[43] その一例は、「此度組同心共大極陣砲術修行申付候に付てハ、是迄矢場的前稽古之儀ハ以来相止、諸事御調練方得指揮、於弘道館内足並進退込替早放等之手続稽古可被申付候」(「天保十四年先手物頭宛達文」、『水戸藩史料』、別記巻十四、一〇二頁)という達文からわかる。要するに先手同心組を銃隊に改め、諸卒に大極陣を修行させることである。

[44] 『水戸市史』中巻三、二三九頁所引史料。

[45] 「水戸藩反射炉掛佐久間致敬宛藤田東湖書簡」、『水戸藩史料』、上編巻十六付録下、九一九頁。

[46] 『水戸藩史料』、上編巻十六付録下、九二六頁。

[47] 同前、九二二頁。

[48] 同前、九二八頁。

[49] 同前、九二四頁。

[50] 同前、九三五頁。

[51] 『下学邇言』、二〇〇頁。

[52] 「時務策」、三六三頁。

[53] 同前、三六五頁。

[54] 『下学邇言』、三二二頁。

[55] 同前。

# Aizawa Seishisai's Accommodation of Western Culture: Resistance and Acceptance

Han Shuting

This paper examines Aizawa Seishisai's interpretation of Western natural sciences, government systems, and religion, and discusses his assertion that introducing military technologies, under the assumption that the acceptance of Western culture in the Later Mitogaku represented a wider pattern of approval. A representative of Later Mitogaku, Aizawa Seishisai asserted with conviction that there was a difference between *li*, "law in nature including cosmological principle" in Confucianism and the principle of Western natural sciences. He regarded Western achievements and advanced technology in natural sciences as a tool, without actually interrogating the principles behind natural sciences. In other words, he merely attached importance to the technology of practicability. As the brains behind Tokugawa Nariaki, a Japanese daimyo who ruled the Mito domain, Aizawa Seishisai had the ruler's ear on topics such as the introduction of military technology, prohibition against Western study and Christianity. His notion of western study and attitude towards western culture had an influence on Tokugawa Nariaki. Above all, his thought about Western culture were reflected in the reformation of the Mito domain, and he had an influence on the *bakufu* through the propositions that Tokugawa Nariaki would put forward. This pattern of Aizawa Seishisai' s pragmatic acceptance of western culture, had an influence on the concept of *wakonyosai*, "Japanese spirit combined with Western learning" and the treatment of Western culture in the process of *bunmei-kaika*, "Japan's civilization and Westernization" from the Meiji period on, which is the period in which we will pay attention to the differences between *kyūri*, "study of natural laws and social ethics" in Confucianism and the principle of western natural sciences.